

# 令和3年度 日本精神科医学会学術教育研修会 報告

## 心理部門

青木 治亮 鶴岡 義明

昨年の日本精神科医学会学術教育研修会は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で全部門中止とした。

令和3年度最初の学術教育研修会は6月23日(水)に心理部門を開催した。ZOOM ウェビナーを使用し、開催期間を1日にして日精協会館(東京)からライブ配信とした。

1 講義目は、「精神科医療の公認心理師へ期待する役割」と題して、公認心理師法の成立に向けて医療団体間の調整で中心的役割を果たされた林道彦先生(日精協副会長 朝倉記念病院理事長)に講演いただいた。公認心理師の存在がチーム医療の成立に不可欠なことを前提に、公認心理師へ期待することとして、専門性の発揮・専門領域の熟練、多職種・協働であるチーム医療への理解、職員・患者のメンタルヘルスの貢献(職員・患者が相談しやすい環境づくり)、地域医療・介護・福祉・広報(心の健康についての発信)への貢献を挙げられた。一方で専門の心理療法について学び続けることは当然であるが、こだわり過ぎることのないようにと話された。精神科病院で公認心理師に求められている心理療法はサポーター・サイコセラピーで、その骨幹となるノンバーバル・コミュニケーションはすぐに身に付くものではないが、精神科病院において重要なコミュニケーション術であること、そして、医療現場では患者情報の共有も重要と話され、日精協で公認心理師資格取得後の研修体制を検討していくと結んだ。

2 講義目は、「精神科医療の将来展望」と題して森 隆夫先生(日精協副会長 あいせい紀年病

院理事長)に講演いただいた。精神保健福祉行政の歩みや動向、精神科医療の歴史、クラーク勧告後の政策の問題点や精神病床許可病床数増加の背景等を話された。精神科病床数・平均在院日数・身体拘束数の国際比較、欧米を例に地域移行・病床削減が行われた顛末について説明され、日本の精神科医療に関する数字には統計上の過誤があり、実態とかけ離れた数字が示される危険性があることを指摘された。マスコミ・書籍等で精神科医療に関するさまざまな情報に触れることがあるが、現在の精神科医療を正しく理解することが重要であるとして、批判や論調に対するの対応についての私見を示して締めくくられた。

昼食・ランチタイムセミナー後の3講義目はタレントの松本ハウス(ハウス加賀谷さん・松本キックさん)のお二人を招き、「統合失調症がやってきた」と題して特別講演を行った。ハウスさんの病状発覚から10年にも及ぶ治療期間、そして社会復帰へ歩む道のり、ハウスさんの復帰を信じて何年でも待つと決意をしたキックさんの気持ちなど、時々笑いを交えながらも大変興味深い話をされた。今後も焦らずに私達に笑いを届けてくれることを大いに期待できるお二人であった。

その後、「多様化する公認心理師の役割」と題してシンポジウムを開催した。淵上奈緒子先生(平川病院)をコーディネーターに、最前線で活躍されている福田由利先生(大石記念病院)、山田香代子先生(大泉病院)、大御 均先生(佐藤病院)にそれぞれ、心理療法/精神科デイケア/地域連携についての自院で実践しているプログラムの説明や事例・データを示しながら成果の報告、

課題の解決方法について話題を提供いただいた。指定討論者の村瀬嘉代子先生（日本心理研修センター理事長）は心理職者が求められることのお話をされた。今までの経験を踏まえて、人の生き方に真剣に関わることは時にフットワークの軽さも重要であり、心理職者の動きはオーケストラの一団員として、総譜が読めて理解でき、その上で自分のパートを全体の調和の中で弾くことであると述べられた。

今回初めて ZOOM ウェビナーを使用して学術

教育研修会を開催した。受講人数は 100 人を予定していたが、予想を大きく上回る 200 名以上の受講申込があった。席数に限りがある会場開催では対応が難しいが、オンライン開催だからこそ増員が可能で、早速オンラインの良い点が発揮された。今後も最良な開催方法の模索が続くが、皆様の学ぶ機会を徐々に取り戻したいと考えている。

最後に、今回新設された心理部門の企画・運営にご多忙の中、2年近くご協力をいただいた福田由利先生・淵上奈緒子先生に御礼を申し上げる。